



抑々の馴初めは・・・。  
南海部 覚悟

淡いベージュの大理石の回廊を奥に進むと、ドーム天井の小部屋の中央に、漆黒の布に包まれ、花と十字架で装飾された棺が、ステンレスの台車に乗せられ鎮座しています。同僚の牧師が聖書を朗読し祈りを捧げ、列席する全員で賛美歌を斉唱します。職員に促され、棺に続いて広いホールに入ると、壁の一面にエレベーターの入り口のような鉄の扉が並んでいます。

電動の台車を操作して、棺を鉄の扉と直角に配置、扉の横の四角い釦を静かに押すと、扉の周りのLEDランプが点灯して、自動扉が上にスライドします。白い耐火煉瓦に覆われた、細長い小部屋が現れます。

台車のロックを外し、小部屋の中の架台に棺をスライドさせると、再び釦を押して扉を閉めます。

「それでは、ご親族代表の方・・・こちらのキーをお願いいたします。」

列席者の祈りの中を、黒いベールに顔を覆った小柄な女性が、静かに進み出ます。職員から、小さなメタルタグの付いた鍵を受け取ると、眼の前の鍵穴に差し込み右に回します。

嗚咽と共に、絞り出すような低い声で、「お父さん――。」

凝視した鍵穴の形が、泪で歪み、同時に周囲の露出が一気に落ちて体がゆっくりと傾き・・・廻りの列席者に抱きかかえられたその耳は、焼却炉に火が入った低い響きを、確かに捉えていました。

黒木玲子が父親の葬儀を終え、喪が明けて警視庁の業務に復帰したのは、一週間後のことでした。蝉の声もつくつく法師が優勢となり、長い夏も終わりを告げようとしていました。

「大変だったな、もう大丈夫なのか？」

捜査一課長の柴田が心配そうな顔で尋ねます。

「はい、親一人子一人で他に身寄りもありませんし、付き合いは教会の牧師さん達だけですから、身の回りの整理に煩わされることもありませんので・・・。」

「――君は、確か養女？お父さんとは血の繋がりは無いんだったよな。」

「ええ、私の出自が分からないものですから・・・子供の頃に縁を頂いて、今まで育てて貰いました。」

「出自が分からないって・・・記憶が無いのか？」

「はい・・・。」

「じゃ、亡くなったお父さんが唯一の身内で、此れからは天涯孤独な身の上になる訳だ・・・。」

「――まあ、辛いだろうがこんな時は一心不乱仕事に精を出すことだ。そのうち必ず、嫌でも拘ってくる仲間が出来る、やがてその中から生涯を共にする身内も出来るだろう・・・今が踏ん張り時だ。」

「――有り難うございます。」

「今はどの事案を担当してる？」

「特に、担当事案はありません、専ら女性被疑者の尋問と裏付け捜査です。」

「君に部下を一人付けよう。」

柴田が内線TELのボタンを押して一言呟くと、オドオドした表情で若い婦人警官が、一課長室に入ってきました。

「――紹介する、白河笑子君だ。」

白河笑子の第一印象は、宛らゴム毬のイメージです。

健康的な小麦色の肌が、夏制服の半袖から溢れ出るようです。

目鼻立ちのハッキリしたキュートな小顔も、やはり小麦色に輝いています。

内圧が高く体の何処にも窪みが無いような・・・それでいて筋肉の引き締まった、東京オリンピックで銀メダルを取った日本の女子体操選手のような、そんなフィジカルの強い印象を玲子に与えました。

「白河君は沖縄出身だ、警察学校の武術系科目はダントツ一位だから、座学系一位の君とは馬が合うんじゃないかと思う。配属されたばかりだから、色々教えてやってくれ。君と白河君とで、捜査一課女性犯罪専従班とする。被疑者が女性の事案に関して、主導して捜査に当たってほしい。以上だ！」



「さっきの一課長の話、セクハラじゃないんですか？」

「――どうして？」

「女性犯罪の専従班に、女性捜査官を充てるって云うのは――。」

「業務を差別しないってことが基本だけど、男女の差が歴然と存在するのも事実よ、男は女子トイレや更衣室に入れないだろうし、メイクアップのディテールはあの年代の殿方には難解でしょう。」

「私、滅多に化粧しませんけど・・・。」

「―――どうして？あなた小顔で目鼻立ちも確りしているから、本腰入れて綺麗にすれば、モテるんじゃないの？」

「男に媚を売るのが、嫌なんです！」

振り返った顔に微笑みを湛えて、「“笑ちゃん”って呼んでいいかな？―――私達気が合いそうね、一課長の云う意味じゃないけど。」

「―――でもね、女性被疑者の犯罪動機の大半は男絡みな。女の醜さの本質は、みんな男性に起因するものよ。男さえ絡まなければ、彼女たち素直で穏やかなものなの。」  
エレベーターを1階のロビーで降ります。

「あれ？地階の駐車場じゃないんですか？さっきパトロールだって―――。」

警視庁桜田門のエントランスから、直ぐ下の東京メトロ有楽町線の電車に乗り込みます。

「今日は、地下鉄のパトロール。鉄道警察隊から支援要請を受けてるの、女性専用車で原因不明の感電事故が続いてるって、車両や設備の問題じゃないみたい、何か作威的なものを感じるって担当の警察隊員から連絡があったわ。」

銀座線に乗り換えて、東上野の東京メトロ本社に向かいます。

対応に現れた業務課の担当者は、すらりとした長身の女性でした。

「まず、車内防犯カメラの映像をご覧ください、後で車両課の者が説明いたします。」

案内された小部屋には大きなモニターが準備され、女性担当者のタブレット操作で、9つに分かれたマルチスクリーンで防犯カメラの再生が始まりました。

夕刻の帰宅時間帯で、車内はかなり混んでいます。

「マルチスクリーンの画面一つが、一両に9つあるカメラの映像に対応しています。」背後から、車両担当と云う中年の男性社員が説明します。

車体の揺れに応じて、一体で揺れていた通勤客の塊が、急にバラバラに散開します。引き攣った人々の顔が映し出され、よく見ると数人が床に蹲っています。

「音が拾えませんが映像だけですが、この時点で客室内は人々の悲鳴で騒然としていたようです。」

「車両設備の漏電等じゃないというのは――？」

「東京メトロの車両は、架線又は第三軌条からパンタグラフ或いはコレクターシューを経由して集電されますが、当然ながら客室は完全に絶縁されています。これは、適用される諸法令にも規定され、完成検査時及び定期検査時の最も重要な検査項目で……。」

「漏電の痕跡は無かったわけですね――？」

「ありません！感電の被害を訴えられたお客様は、この時5名でしたが、次の停車駅で暫らくお休みいただき、体調に支障が無いのでそのままご帰宅頂きました。もし仮に車両設備からの漏電だとしますと、電圧・電流の関係上とてもこの程度では済みません……。」

「頻発しているって訊きましたが、どの程度？」

女性担当者が自分のタブレットを操作しながら、「ここ2か月で17件発生しています。何れも朝夕の通勤時間帯、東京メトロ9路線の内の4路線、銀座線・丸ノ内線・有楽町線・日比谷線で発生しています。」

「週2件以上ですわね、17件の感電事故発生時の映像をご提出いただけますか？専門の

部署で解析してみます。」



夕刻の帰宅時間になるのを待って、女性担当者と共に、混雑する銀座線の女性専用車に乗車します。帰宅を急ぐOL達が、吊皮やステンレスの手摺棒に身を預けながら、一心にスマホを操作しています。

一日の業務を終え、どの顔も一様に疲労の色を醸し出してはいますが、他の車両と違い、場を憚らない大声や喧騒とは別世界の、穏やかで仄々とした優しい空気が車内を満たしていました。

「防犯カメラの設置で、痴漢被害はだいぶ減ったんでしょうね。」

玲子が小声で尋ねます。

「設置直後は、劇的に減りましたが、最近また増えています。」

「でも、この車両では皆無でしょ？」

笑子がドヤ顔で確認します。

「——それが、他の一般車両より件数が増えてるんです。」

「——どういふことですか？」

「殆どが、女装した男性の迷惑行為なんですけど・・・完全に男性を締め出すことは、法規上できませんので・・・ただ最近、女性が女性に対して行う事案が増えているんですよ。」

その瞬間、信じられないと云った表情で3人の視線が合い、周りを気にしながら、お互いの頬を僅かに赤らめます。

赤坂見附で丸ノ内線に乗り換え、銀座で日比谷線に乗り換えて、東上野の東京メトロ本社へと戻ります。

桜田門に帰庁した玲子は、提出してもらった防犯カメラの映像をパソコンに読み込ませながら、「鑑識に持って行っても相手にされないだろうから、私達だけで解析するわよ。取りあえず、17件の映像に同じ人物が映っていないか確認しないと・・・。」

「——もう終わってますよ先輩。私のスマホにダウンロードして顔照合アプリでさっき確認しました。17件に共通して登場する人物は3名だけです、本部のデータベース

とリンクさせて前科があるか確認中です。」

「あなた、意外と手際がいいのね。——この3人？」

プリンターから出力された、解像度の低い顔写真を見ながら呟きます。

「エッジを強調してもう少し見やすく出来ますけど……。」

「明日、東京メトロにこの3人の顔を照会してみて。駅のカメラでどの改札を通ったか分かる筈よ、もう遅いから今日はこれで上がりましょ。ふたりの初仕事だから、近くのレストランで食事しない？奢るわよ……。」

「——ガッテンだ！」

次の朝、ふたりは再び有楽町線の女性専用車の中にいました。

通勤ピークの時刻でしたが、車内の混雑は思ったほどでもなく、楽に会話が交わせます。

日焼け防止の為に上下黒づくめで、体の線のハッキリ分かるTシャツとレギンス、長いアームカバーとサングラスを纏った女が、ひとりドアの脇に立って目立ちます。

「あなた、お酒強いのねえ。でも、あんなふうになると思ってもみなかったわ……。」

「御免なさい！警察学校では飲めなかったもんですから……つい。」

「完全に眼が据わってたわよ、怖かった、まるで奈良の東大寺の広目天……。」

「———何ですかそれ？」

昨夜レストランの食事の後、ふたりは玲子の部屋で飲み直したのです。

男も女も三十半ば過ぎまで独身を通せば、身の回りの嗜好が男女の隔てなく類似してきて、若い男なり女なりを自分の部屋に連れ込んで話をしたいという願望には、共通の切実さがあります。

特に女性の場合、従属意識によって罪悪感が無く、世間の評価によって自らが破綻するのも稀で、昨夜の玲子の場合、相手が偶々笑子と云う同性ただただで、若い娘に深夜酒を飲ませ本性を吐露させて面白がるのは、褒められた行為ではないのですが。

「———3回くらい、無理やりキスされたわよ。」

「覚えてない～御免なさい～。」



電車が都心に近づくに連れて車内は混雑してきます。

連結部分に近い車端に押し込められたふたりは、ステンレスの手摺に掴まって向かい合い、身長差の関係で、玲子の視線が丁度笑子の唇の辺りに揃います。

淡い小麦色の頬と、南方系鱈子唇に鮮やかなオレンジのルージュが健康的で、ポイント通過の横揺れをいいことに、よろけて互いの胸を密着させた途端、若々しい二つの膨らみが着衣を透して玲子の鼓動を高めます。

窓の外が明るくなって、池袋のホームに滑り込んだその時でした！

手摺から強い電撃を受けてふたりとも思わず身を縮めます、甲高い女性たちの悲鳴が錯

綜し、騒然とした車内にいきなり急ブレーキが掛かり、乗客全員前方へ倒れ込みます。耳障りな摩擦音を残して停止し、ドアが開いた車両から、乗客が次々避難します。前の乗客を押し倒す様にして、ドアの脇に立っていた女が駆け出しました。

「笑ちゃん、あの黒づくめの女！」

「分かりました、追いかけます！」

ホームを走り去る女の反対方向から、血相を変えた駅員が担架を抱えて駆けつけてきました。

「あの女、顔照合でピックアップされた3人の内のひとりです、間違いありません！」  
地上出入り口付近で女を見失った笑子が、息を切らせながらホームに帰ってきました。

「サングラス外した顔、見たの？」

「見ました、顔の特徴、目に焼き付けました！さっき入った東京メトロからのメールによると、専らこの駅で改札を出入りしているようです。」

「池袋だけ？」

「———専ら池袋駅だそうです。」

「変ねえ、普通、出発駅と到着駅が有りそうなものじゃない？兎も角、地上に出て、駅周辺を歩いてみない？」

ウィークデーの早朝、駅周辺はまだ通勤ラッシュで混雑していました。

ひと際背が高いサンシャイン60が、蒼く霞んで遠望されます。交差点の反対側に、巨大な立体駐車場があって、今その際から、二人乗りのバイクが爆音を立てながら急加速で飛び出してきました。直後に一台の白バイが、サイレンを鳴らして追いかけます。喧騒絶えないターミナル駅の、日常です。

桜田門に帰ってくると、「あの女、警視庁の前科者リストには載ってないようです。顔照合された他の二人についても連絡がありました、東京メトロが女性専用車の利用状況調査の為に委託した、調査会社のアルバイト員のようです。」

「東京メトロは今朝の事故について・・・？」

「重症が5人、軽傷は70人以上になるそうです。殆どが急ブレーキによる転倒に伴うものですが、運転士は非常制動を掛けた記憶が無いと云ってますので、車内での原因不明の放電により、車両の電子部品が影響を受けた可能性があるとしています。」

若い刑事が黒い女物の手提バックを持ってふたりのブース（女性犯罪専従班）にやってきました。

「池袋駅の事故の直後に、接收されたバックです。交通課から廻ってきたんですが、黒

木さんの件に関係あるかと思って・・・。」

「———どうしたの？」

「バイクに乗った二人組の引ったくりなんですよ、白バイが追いかけて現行犯逮捕です。」

「———あの時のバイク！」

笑子が大声を上げます。

「―――持ち主は？」

「それが分からないんですよ。被疑者を連行して、引ったくり現場に引き返すと、既にいなかったようです。白バイ隊員によるとメッシュジャケットにタイトなパンツの女性だそうです。そんなに若くはなかったと云ってます。」

バッグを開けると、黒いTシャツとレギンス、長いアームカバーが出てきました。

「あの女です！トイレか何処かで着替えたんだ。」

「ちょっと待って、この生地何か変じゃない？ほら、金属の線が織り込んであるわよ・・・。」

「Tシャツとレギンスと云うか、みんな繋がっていますよ。アームカバーを含めて、女性用のタイトなツナギですねこれは。」

若い刑事が全体を持ち上げて、拡げて見せます。

「腰のところに、**USB**コネクタみたいなのがありますよ・・・。」

「笑ちゃん、科捜研に持って行って調べて貰って。少なくとも朝っぱらから、いい年した女が電車の中に着てくる衣装じゃないわね。」



警視庁は池袋駅の事故を受け、更なる重大事故に繋がりがねない悪質な悪戯として、管内特別事案に格上げし、防犯カメラの顔写真を捜査員全員に配布して、刑事部の本腰を入れて捜査することとなりました。

「―――前科者リストには無かったって云ってたわね。」

玲子と笑子のブースの周りに、様々な捜査資料が積み重なってきました、宛ら当該事案の捜査本部のようでもあります。

「別の視点からもう一度調べてみて・・・例えば、前科者の家族とか同僚とか・・・。」

「膨大な数ですよ、プライバシーの問題で、データベースに上げられてない関係者もあるでしょうし・・・。」

「通勤電車内の犯罪に限定してみましよう・・・スリに喧嘩、置き引きに・・・。」

「―――痴漢！」ふたりが声を揃えました。

暫らくパソコンを操作していた笑子が、急に回転椅子から飛び上がって、「痴漢でヒッ

トしました、あの女です！」

「内田侑子、現在所在不明ですが、5年前に夫が東京都迷惑防止条例で起訴されています。冤罪を訴えて、2審まで争ったものですから、裁判傍聴時の顔写真が保存されていました。」

「裁判はどうなったの？」

「2審で有罪判決です。最高裁に上告中に被告が亡くなっています、保釈中の自殺のようです。」

「東京メトロでの痴漢行為？」

笑子が頷きながら、「現行犯逮捕だったようです。」

「よし！その女性と旦那の事件について、詳しく調べてみましょう。」

内田侑子の夫を逮捕した鉄道警察隊員は、JR新宿駅分駐所に所属していました。

「現行犯逮捕の理由ですか？——被害者の周りに、男は被告しかいなかったからです。」

「——証明できる根拠があるんですか？」

「あの電車が、東京メトロの防犯カメラ設置第一号だったんです。映像は裁判に証拠提出されています。」

「被告が、被害者の体に触る映像？」

「行為そのものは写っていませんが、被告以外の男性が周囲に一人もいなかったことは、映像で証明されました。」

「東京メトロのどの線ですか？」

「有楽町線です、当時池袋駅駐在でしたので、私が逮捕しました。」

「有罪判決の決め手となった物証は、被告人の手に付着した、膣液だそうです。DNA鑑定で被害者のものと認定されています。」

新宿駅近くの駐車場に停めた警察車両の中です。刑事確定記録のダウンロード許可が下りて、笑子がタブレットで確認しています。

「被告はそれについてどう云ってるの？」

「池袋で下車するとき、誰かに手を掴まれたって主張しています。下車したドアの正面に、さっきの隊員が警備していて、被害者の訴えによって任意同行を求めたようです。」

「防犯カメラの映像を確認したのは？」

「東京メトロのシステムは、詰め所で常時モニターできるようになっていまして、そのまま現行犯逮捕されたようです。」

「関係者周辺に、強い固定観念がありそうね・・・。」

「そうです！女の体には、女だって興味があるんです！」

言葉の背後に切実なものを感じて、一歩引く玲子でした。

内田侑子の出身地は仙台でした。中学、高校と地元の学校を卒業し、地元の4年制大学に入学しています。

「ごく普通の女子高生でしたよ、成績も中位でしたから、よくあの大学に受かったものだ、当時は感心したものです。旦那さんとは、大学で知り合ったと訊いています。あんな不幸なことになるとはねえ・・・気の毒です。」

担任だったという高校教師は、薄い頭の汗を拭きながら、昔を思い出しつつ話してくれました。

「内田にはひとつ他人にない特技がありましてね、女子高生たちが手を繋いで輪になるじゃないですか、その中に入って一心に念じると、繋いだお互いの手がビリビリ痛くなるんです、最後には耐えきれなくて悲鳴を挙げて手を離すんですが・・・まるで静電気の実験のようでしたね。」

「そう云えば或る日、物理実験室でバンデグラフ起電機を内田に操作させたんです。モーターのスイッチを入れた途端、内田の体から部屋中にスパークが飛び交いましてね、慌てて電源コンセントを抜いたこともありました。静電気を大量に蓄える特殊体質と云うんですか、小さい頃はそれで随分苛められたこともあったと訊いています。」



仙台から帰庁すると、科捜研から来訪を促すメールが届いていました。

別棟に在るラボに出向くと、「――まあ、得体の知れん物を持ち込んでくれましたね。何処で見つけたんですか？」

困りきった様子で、担当の研究員が対応してくれました。

「地下鉄の放電事故に関係している可能性のある、接收品です。」

「簡単に云いますと、衣類の形をした大型のコンデンサ。生地に織り込まれた細かいアルミ線のネットに、電気を蓄えたり放電したりする為の装置、と云うところでしょうか・・・キャパシタとも云います。」

「USBコネクタのようなものは？」

「其処に、電源を繋ぐんだと思います。携帯できる小さな電池でも、時間を掛ければかなりの電荷を印加できると思います。」

「これを、人が着たらどうなります？」

「どうもなりません・・・高電圧・微電流ですから、多少皮膚がチリチリする程度です。」

そこで、仙台で訊いた内田侑子の話をすると、「もし、そんな人間がいるなら・・・この装置は静電ブースターとして作用するかもしれません。」

「――静電ブースター？」

「一般にコンデンサは電気回路内で受動素子としての動作しかしません。電荷の増幅や整流と云った利得を伴う能動素子の働きはしないのですが・・・もしその女性が、素肌

にこの装置を装着すれば、皮膚の表面に蓄えた電荷の、何倍もの静電エネルギーを一気に放出することも出来るかと思います。」

「ただし、時間を掛けて充電した電荷を、増幅して一瞬で放電するとなると、いくら皮下脂肪の絶縁体があるとはいっても、皮膚のチリチリ程度では済まない筈です。」

「その高校教師の話では、確か“静電容量”って云ってましたけど。自分の体のそれを、自分の意志で変化させることが出来るようなんです・・・。」

「それは凄いですね、もし本当ならこの装置で増幅された電荷も、電圧・電流を自由に調整して出力出来るってことですよ。電荷を時間軸に沿って変化させれば、絶縁された対象物にも誘導電荷を印加できる。恐らく通勤ラッシュ時の地下鉄は、乗客が衣服を介して密着している状態でしょうから、全員が一塊の帯電体とも考えられます。アースされた導体、つまりステンレスの手摺なんかに触れた途端、全員を電撃が襲う訳です。」

「放電のメカニズムは解明できたわ、今度何処で実行するかよね・・・。」

捜査一課のブースに帰ってきた玲子が、すっかり日の落ちた窓にブラインドを下ろしながら呟きます。

「また同じことをやるんでしょうか？」

「やるわきっと、あなたこの事案の動機は何だと思う？」

「夫を失ったことによる、被害者への逆恨みですか？」

「私は、東京メトロに対する恨みじゃないかと思うの、防犯カメラを導入したが為に、痴漢は、男による女に対しての行為と云う先入観が助長され、それによって夫が死に追いやられた・・・被害者や本当の犯人じゃなくて、東京メトロそのものに電撃を加えるのが、目的じゃないかしら。」

「だから、専ら女性専用車を狙うんですか？」

「そう！女性しか乗ってない車両にも痴漢はいるよ、一般の車両より多いんだよって・・・。」

「明日、その被害者の女性に、会ってみましょうか。刑事確定記録から住所が分かる筈です。」

「被告やご家族にはお気の毒だとは思いますが・・・こちらも早くに示談して貰えるもんだと、思ってたので。」

翌日、指定された喫茶店で、被害女性と会いました。20代後半の小柄な女性です。

「失礼なことをお聞きします、答えたくなければ答えなくて結構です。行為に及んでいるのが、被告の手だという確実な記憶が有るんでしょうか？」

「それが分からないんです・・・私は、池袋で警察官に助けを求めただけで、事情聴取でも裁判でもそのように云ったんですけど・・・私の周りに男は被告だけだったという、廻りの雰囲気の中で・・・。」

今にも泣きだしそうな表情で、女性が続けます。

「これも何度も云ったんですけど・・・男性の掌にしては、小さくて華奢だったような気がします。それと、爪が長くて痛かったんです。」

翌日から再び、地下鉄女性専用車内のパトロールが始りました。

温暖化防止の施策として、環状7号線以内への車の乗り入れに規制を掛けたため、地下鉄を含む首都圏交通機関のラッシュ時の混雑は、一時期より酷くなっています。

玲子も笑子もスリムな半袖シャツとパンツ姿で、車両の端で体を密着させながら耐えていました。

「――御免なさい先輩、掴まる処無いんじゃないですか？」

「いいのよ笑ちゃん。倒れそうになったらあなたに抱きつくから・・・。」

「そうして下さい、胸でもお尻でも・・・頑丈に出来てますから。」

「今日はきっちりお化粧してるのね、これが男とだったら気持ち悪いけど・・・女性専用車のいいとこね。」

ポイントを通過して強い横揺れの刹那、笑子が右手で玲子の腰を引き寄せます。一瞬視線が交錯して、恥らいながら俯きます。

お互いの化粧の香りに満たされながら、忍耐の中の束の間の至福に、二人とも身を委ねていました。

ラッシュから解放された上野駅のコンコースで、「女性専用車のパトロール、やっぱり必要なんでしょうか？」ウンザリ顔の笑子が呟きます。

「他に方法がある？あなたの体、触りまくるのも楽しいけど・・・。」

「東京メトロに頼んで、女性専用車のLIVEの映像、配信して貰ったらどうですか？顔照合アプリも乗っけられるし・・・。」

「――何でそれを早く云わないの！」

云い終らないうちに、頭上の東京メトロ本社を目指して走り出していました。



3時間後には、東京メトロが運用する全ての防犯カメラの映像が、顔認証アプリとリンクして、内田侑子を捉えた直後に桜田門に配信され、同時に追跡可能なシステムとして構築されました。

捜査一課は、東京メトロの主要駅に複数の刑事を配置し、被疑者が網に掛かるのを待ちます。3日後、一課に設置されたモニターにアラームが表示されました。

「池袋駅、あの女よ！鉄道警察の詰め所に連絡して！」

「確保させますか？」若い刑事が確認します。

「物証が無いからまだ駄目、近くにいる刑事に追跡させて！」

女は改札を抜けると、真っ直ぐホームに向かいます。詰め所に待機していた刑事が追跡を開始します。

「副都心線に乗るつもりだわ、見失わないように！」

刑事たちも一定の距離を保ちながら乗車します。

新宿3丁目で丸ノ内線に乗り換え、国会議事堂前で降りて・・・。

一課長室から、柴田も出てきてモニターに注目します。

「黒木さん済みません、見失いました！」追跡中の刑事から無線が入ります。

「今どこ！」

笑子が慌ててモニターのマルチスクリーンをスクロールします。

「ああっ！溜池山王の地下道です、銀座線に乗り換えるみたいです！」

「銀座駅の刑事に連絡して！」

銀座駅の刑事が動き出しました、到着する電車をホームで待ちます。

電車が到着すると、「被疑者は車内にいるようです、乗り込みます！」

次の瞬間、「畜生！逃げられた！本部、女に逃げられました！」

ドアが閉まる直前に電車を駆け降り、雑踏に隠れてカメラの映像でも追跡できなくなりました。

「――誰か、日比谷線のホームに向かわせて！」

ホームのカメラが、電車のドアの窓越しに、悔しがる刑事の顔を捉えていました。

暫らくすると、別の刑事から無線が入ります、「黒木さん！日比谷線で被疑者を目視しましたが、電車に間に合いませんでした。被疑者が乗ったのは女性専用車です！危険です！」

「――上野だわ！本社の真下でやるつもりだわ！」

「全員、上野駅に集めろ！」背後で様子を見ていた柴田が大声で叫びます。

モニターのマルチスクリーンを凝視していた笑子が、「――先輩！さっきの女性専用車に内田は乗っていません、被疑者の姿を見失いました！」

「――何ですって！」



銀座駅で日比谷線に乗り遅れた刑事が、上野集合の指示に従い、ひとつ後の電車に乗車しています。車窓が明るくなって上野駅のホームに滑り込んだ刹那、眼の前のベンチシートに座っていた小柄な女性が、肩に掛けた薄いショールを取って立ち上がります。

大きなサングラスを外すと、「———ああっ！内田侑子！」

その瞬間、強い電撃を受けて全身の筋肉が引き攣ります、崩れるように倒れ込んだ体から、意識が徐々に薄れていきました。

「東京メトロ日比谷線車内で、放電事案発生！負傷者多数！警視庁捜査員一名意識不明！地下鉄上野駅現在閉鎖中！」

警察無線が錯綜します。混乱は上野駅全体に及び、最早防犯カメラによる顔認証システムも機能しません。

「もう、追跡は無理ね・・・笑ちゃん、池袋駅に行こう！内田は必ず池袋に帰ってくる！」

「どうして、内田が池袋に帰ってくると分かるんですか？」

池袋駅に向かう車の中です。ハンドルを握りながら、笑子が尋ねます。



「内田侑子にとって、今度のことは、ある意味お墓参りのようなものだと思うの。」

「お墓参り？」

「池袋駅は亡くなった旦那が逮捕された場所。みんなお墓に参るときは、其々一定のルーティーンに従って毎回同じような所作になるでしょ、広大な墓所に毎回違う入り口から入ったりしないわ。」

「じゃ、電車の中で放電して廻るのは、お墓の前で線香に火を点けるようなものですか？」

「痴漢の被害者や、本当の犯人にそれ程の恨みを持って居るわけじゃない・・・理不尽に思うのは、男が加害者で、女が被害者だって云う世間の固定観念。それに一番捉われるべきではない行政や鉄道事業者が、寧ろ助長している。本来なら、女性専用車の中で片っ端から痴漢して、理不尽さをアピールするだけの処を、自分の特技をもろに発揮しちゃった訳じゃないの・・・。」

「動機の解明、お見事です！」

「それと、池袋駅に帰ってくるのは、もうひとつ理由があると思うの・・・駅の中で捕捉するのは無理だろうから、駅前の立体駐車場の横に停めてね。」

昼下がりの繁華街、それでも我国有数のターミナル駅は、スマホを手にした人々で、ごった返しています。

駐車場出口の横の、小さな空き地に車を停めて、息を潜めて被疑者を待ちます。その時、駐車場のポールが上がって一台の大型バイクが出てきました。

「笑ちゃん！あれよ、あのバイク追って！」

「―――でも、内田は？」

「メッシュジャケットにタイトパンツ、あれに間違いないわ！」

バイクは東池袋料金所から首都高5号線、中央環状線から江北ジャンクションを経由して、北へ向かいます。

「―――やっぱり東北道に入るつもりね、応援を依頼するわ。」

暫らくすると、上空のヘリから無線が入ります。

「——手配のバイク、岩槻インター北で捕捉いたしました、かなりのスピードです、並行して追跡します！」

「距離を保ち、気付かれないように願います。刺激すると自暴自棄に走る可能性があります！」

上野駅に集まっていた同僚刑事達の警察車両も、5台合流して併走します。

「池袋駅から先の足は如何するんだろうって、ずっと考えてたの・・・殆どの交通機関に防犯カメラが付いてるから、自宅近くまで足取りを追跡されかねないわ。池袋駅の近くの駐車場に、車かバイクの月極め契約してるんじゃないかと思ったの・・・。」

追跡を開始して3時間になります、警視庁のヘリが燃料切れで基地に帰還し、替わりに宮城県警のヘリに応援を依頼しました。

既に福島・宮城の県境を越え、白石インターの手前を北上しています。

玲子たちの車の約2Km先を、内田侑子のバイクが豆粒のように走っています。

「仙台まで、逃走するつもりでしょうか？」

「——と云うか、仙台から週2回出張してたんじゃないの？」

「——潜伏先が仙台なんですか！」

「出身が、仙台だからね・・・あり得るわ。」

晩夏の日差しが西に傾き、一面の丘陵を茜色に染めます。

「あなた、車の運転好きなの？」

「——ええ、好きですが、何か？」

「シートに深く座って、両腕を伸ばしてるからよ。私はそんな風出来ない、ペダルが遠いからハンドルにしがみついちゃうの・・・。」

「普通の女性はそうです、兄が沖縄でラリーやってましたから、見様見真似で私も・・・。」

「無免許で、ぶっ飛ばしてたの？」

何を思ったか、伸ばした左腕に自分の右腕を添わせると、「こんなに色が違う・・・あなたは小麦色で、私は蒼白い。」

「日焼けしてるからですよ！」

「私、日に焼けると赤くなってヒリヒリするの、だから夏場は日焼け止めが欠かせない・・・。」

「——私、塗ったこともありません。」

「ふたりの体全く正反対ね、まるで男と女みたい・・・。」

「私は、男じゃなくて女です！」不満そうに唇を尖らせます。

「分かってるわよ、でもあなた、女の子にモテるんじゃないの？」

そう云いながら、小麦色の前腕を優しく摩ります。

その時、一課長の柴田から無線が入りました。

「電撃を受けた一課の刑事が、病院で亡くなった・・・残念だ。」

柴田の声が詰まります。

「2年後定年の予定だった、心臓が悪くてペースメーカーを胸に入れていた・・・。」

「電車内の防犯カメラが、電撃の一部始終を捉えていた、確実な物証だ！追跡中の全捜査官に告ぐ、内田を確保しろ！許すな、しょっ引け！」

ふたりとも前に向き直ると、「笑ちゃん、距離を詰めて！」

「ガッテンだ！」

赤色回転灯を展開し、サイレンを鳴らしアクセルを踏み込むと、遙か前方に点のように見えていた内田侑子のバイクが、見る見る大きくなって、疾走する姿を背後からはっきりと捉えられるようになりました。

ヘルメットの間隙から長い後ろ髪を靡かせ、体の線を露わにしたタイトなラインは、多くの男性にとって欲情を掻き立てられる妖艶な姿なのかもしれません。

バイクの右側を併走して、助手席の玲子がスピーカーで呼びかけます。

「警察です！速度を落とさないで、バイクを路肩に寄せなさい！」

ヘルメットのシールド越しにチラッと見ただけで、更にスピードを上げます。

「内田侑子、止まりなさい！警視庁捜査一課です、スピードを落とさないで！」

笑子も負けてはいません、ピッタリと後ろに着けて、寸分たりとも間隔を開けません。

気が付くと併走していた他の警察車両は、遙か後方に後退していました。

「笑ちゃん、無理しないで！危険だわ！」

「分かっています！」

その時、上空の宮城県警ヘリから緊急無線が入ります。

「追跡中の各車に告ぐ、約3Km前方で事故発生！バルクトレーラーが横転、積み荷と思われる粉体が大気中に散乱、路面が目視できません！留意せよ、留意せよ！」

山塊が両側から迫って、渓谷の入り口のような狭い場所から、白い煙の塊がもくもくと立ち上がり、路面を被って近付いて来ます。

「——笑ちゃん止めて！」玲子が叫びます。

得体の知れぬ白い塊に、笑子も恐怖を感じたのか、速度を落として車を路肩に寄せます。

内田のバイクはそのままのスピードで、道路の長いパースラインに沿って煙の塊に近付きます。

「死ぬ気だわ！」

豆粒のようになって煙に突っ込んだ次の瞬間！白い塊が真っ赤な炎に替わって夕暮の全空を照らします、轟音と共に熱い爆風がふたりを襲います、後続の数台が急ブレーキにスピンして、ガードレールに激突、停止します。

同僚の刑事達が到着し、スピンした車の運転者を助け出すのを横目に見ながら、二人は茜色の空の先に、どうしようもない遣る瀬なさを感じていました。

東北道の爆発は、バルクトレーラー積み荷の小麦微粉末が、空中に広範囲に散乱しての粉塵爆発でした。内田侑子以外の人的被害は、トレーラー運転手も含め、幸い全員軽症で済みました。

内田が粉塵の中で、自らの体から放電したかどうかは、今もって不明です。

現場の事後処理、直後の検証、宮城県警本部に移動しての事情説明、事件処理に伴う業務の分担打合せ等で、ふたりが解放されたのは深夜となりました。

「今から東京に引き返すとなると、明け方になるわね。一課長に許可を取って今夜は仙台に泊りましょう。」

笑子が仙台駅近くのホテルにTELすると、「ツイン一部屋しか、空いてないそうです。」

「私は、構わないわよ。女同士だから・・・。」



仙台駅の長い新幹線ホームが見下ろせる、ホテルの一室です。

寝静まって人通りのない街路に、ナトリウムランプのオレンジ色がアスファルトに反射して艶やかです。

先にバスタブから上がった玲子が、ホテルの部屋着を肩から掛けて、ドレッサーの前で髪を乾かしています。

ドライヤーを持って立ち上がったその時でした！

「御免なさい玲子さん！私、玲子さんのこと、好きなんです・・・。」

背後から玲子の両肩を抱きしめます、強い力でベッドに押し倒し、俯せのまま部屋着をはぎ取ると、全裸の玲子の上から覆いかぶさります。

「――笑ちゃん、あなた何てことを！」

仰向けにして首に手を廻すと、火照った唇を重ねます。

「やめて！お願い！」

引き離そうともがく両腕が引き攣ります。

玲子も既に30代半ば、縁が少ないとはいえ数人の男は知っています。

ただ、玲子にとってのそれは“凌辱”と云う言葉しか思い当たらない行為でした。

男に抱かれる女は誰でもその瞬間、全身を凌辱されているに他ならない・・・男の硬い筋肉や骨格、深い体毛に嫌悪を感じて、行為から逃げ出したことも何度かありました。

私は、女として結婚できない・・・そんな疎外感を、仕事で払拭してきたことも事実です。

そして今夜、今私の体を凌辱しているのは、同じ女の柔らかい体・・・気の合う部下の体、可愛い妹のような存在・・・。

これは凌辱ではない、女同士同じ体の“湿潤”だと了解した時、抵抗して突っ張った両腕から、力がゆっくりと抜けてゆきました。

体を入れ替え、笑子の小麦色の裸体に白い自分を重ねると、優しく頬を擦りながら肉厚の可愛い唇を、舌でこじ開けようとしていました。

―――終わり。

以上、全てフィクションであり、実在する個人・団体と一切の関係がありません。悪しからずご承諾下さい。尚、添付した写真は、Photok 及びPhotoACから転載させて頂きました。

抑々の馴初めは・・・。

<http://p.booklog.jp/book/122234>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122234>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト